

国際間オンライン言語文化交流協同授業（VE）の実践  
－日韓の大学間における「即興型」交流授業の事例－

**A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange between Korean and Japanese University Students**

呉恵卿（OHE, Hye-Gyeong）

国際基督教大学（International Christian University）

**Abstract**

This paper reports on a case of an ‘impromptu’ virtual exchange (VE) between Japanese and Korean universities. VE is an online collaboration where students from different cultures or locations work together as part of their courses, guided by instructors and/or experienced facilitators. The paper aims to develop and improve a VE model for university foreign language courses that are offered as liberal arts courses, especially for beginners. The paper also presents the findings of a post-VE survey with the students and discusses their evaluation of the VE. The survey showed that the students had a positive and enthusiastic attitude towards the ‘impromptu’ VE, even though it was a one-time event and did not have the ideal conditions for a VE. A common theme that emerged from the survey results was the participant’s eagerness to build meaningful relationships with partners from the target language and culture. They also demonstrated empathy and openness towards their partners, which are essential skills for intercultural communication. The paper argues that curiosity and open-mindedness about cultures are crucial factors for developing effective intercultural communication skills. The paper concludes that the VE helped the students to develop these skills naturally through their participation.

**1. はじめに**

国際間オンライン言語文化交流協同授業（Virtual Exchanges, 以下 VE）とは、教師のガイドラインや指導（guidance）の下で、一定期間にわたってオンライン授業やプロジェクトに参加する学習者が、異なる文化的背景を持っている人々と連携し異文化間相互行為を通じて学ぶことを指す（O’Dowd & Lewis, 2016；呉, 2022）。ICTの進化によって新しい教授法として登場したVEは、当初、「Telecollaboration」、「Online International Collaboration (OIC)」、「Online International Exchange (OIE)」、「Collaborative Online International Learning (COIL)」など様々な名称で呼ばれている<sup>1</sup>。日本でも2018年、「大学の世界展開力強化世界展開力強化事業<sup>2</sup>」という名の下で

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

支援事業を行って以来、大学のカリキュラムでも導入され始めた（文部科学省，2018）。ただ、COIL は、外国の大学と共通カリキュラムまたはシラバスを編成して大学間で運営されるものを意味するのに対して（Rubin, 2016; SUNY COIL<sup>3</sup>）、VE は ICT を活用して行われる異文化間交流授業やプロジェクト全般を指すものとして、より広い意味で使われている（呉，2022）。本稿では、事前に共同カリキュラムやシラバスを作成して行われた COIL でなく、韓国の大学と単発的に行われた国際間オンライン言語文化交流協同授業を分析の対象としているため、「VE」という用語を用いている。

IT の発達に伴い、オンライン空間における言語間・文化間の接触または交流も増えつつあり、COIL をはじめとする VE は学習者の異文化コミュニケーション能力（Intercultural Communicative Competence、ICC<sup>4</sup>）を高める画期的なアプローチとして脚光を浴びている。また、VE は、ICC を育むアプローチとして最近注目を集めている「プロセス中心アプローチ（process oriented approach）」（Byram, 1997；Byram & Zarate, 1994；Deardorff, 2006；Gardner, 1985）を援用した教授法でもある。「プロセス中心アプローチ」は、学習の成果や結果に重点を置く「結果中心アプローチ（product-based approach）」に対比する概念で、学習の場における社会的相互作用や文化的要因を重視する Vygotsky（1978）の構成主義（constructivism）を応用した教授的实践である。この教授法では、学習者が学びと社会的、相互行為プロセスに能動的に参加することによって、教師から学んだ内容を自分の内面で再概念化（reconceptualization）するプロセスを経ることになるが、このような個人の実践と経験こそ学びを構成する重要な要素となる（Liddicoat et al., 2003；Moloney & Harbon, 2010；呉，2022）。

これまでに COIL を含め VE を取り上げた研究あるいは実践報告は、英語または英語を媒介にして行われたものが絶対的多数を占めているが、最近は日本語を媒介にして行われた COIL（森山，2019；小玉，2018 など）や、英語・日本語以外の言語教育における実践例も現れつつある（綾川，2021 など）。本稿で取り上げている日韓間の言語・文化交換学習型の VE を取り上げたものには Ohe（2018）、呉（2020；2022）などがある<sup>5</sup>。これらの研究は、COIL 型 VE を対象にしており、プロジェクト型学習（Project-Based Learning, PBL）またはタスク中心教授法（Task-Based Language Learning, TBLT）に基づき、日本と韓国の教師により事前に緻密にデザインされた形の VE を取り上げている。しかし、外国語科目が日本の多くの大学で一般教養授業として行われており、授業の多くが非常勤講師によって提供されているという現状を勘案すると、共同シラバスを設け学期を通して数回にわたって共同プロジェクトを COIL の形で実施するということはそれほど容易ではない。多くの教師が教育の場で VE を導入するためには、より実践が容易な形の VE を視野に入れつつ教室デザインを行う必要があると思われる。本稿では、教師がより実践しやすい形の VE 授

業の一つのモデルとして「即興型」VEの実践例を紹介し、日本の大学で一般教養科目として行われている外国語授業におけるVEの導入と活性化に向けて貢献していきたい。

### 2. 「即興型」国際間オンライン言語文化交流協同授業（VE）の概要

#### 2.1 VEの実施に至った経緯と事前準備

筆者は2015年度より日韓の大学間のVEを韓国語教室に導入しており、学習者のICCを育みながら目標言語を使って目標言語圏の人々と交流する機会を設けるよう努力してきた。しかし、2020年初め世界中に広まったコロナ禍で全授業がオンラインに切り替わるなど、これまで全く経験したことのない急速な変革の中でVEの実施は全面中断されていた。その中、2021年度秋学期に入り、オンライン授業もある程度定着した時点で、韓国の極東大学校（FEU）の教員より、自分が担当する日本語授業の学習者と筆者が担当する国際基督教大学（ICU）の韓国語授業の学習者と交流を希望するというメールが10月末に届いた<sup>6</sup>。ICUは3学期制で、秋学期は9月から11月の中旬までとなっていたため、諸事情を考慮すると実現可能な同期型のVEの回数は1回のみであった。しかも、授業登録前にシラバスによって告知されていなかった即興的なイベントだったため、受講生に韓国の大学生とのVEを希望するのかどうかという内容のメッセージを授業用のグループLINE<sup>7</sup>へ送り、希望有無を回答してもらった。回答者の全員がFEUとの交流を希望するということを確認し、交流先の教員とZoomで話し合い、11月4日（木）にICUの「韓国語II」受講者とFEUの「グローバル日本語2」受講者を対象に「日韓の大学生活」というテーマで、リアルタイムで交流を行うシンクロ型（同期型）VEを1時間程度行うことにした。

VEに先立って、筆者はオンライン掲示板アプリの「padlet<sup>8</sup>」を使って、図1のように「交流先の学生たちと話し合いたいテーマは何か」や「どのような交流を希望するのか」について、ICUとFEUの学生に日本語または韓国語で自由に書いてもらった<sup>9</sup>。ICU側では、「日本（文化）に興味を持ったきっかけ」、「日本語を勉強する理由」、「韓国でよく使われる日本語」、「日本語学習において難しい点」、「好きな日本ドラマ」、「好きな日本料理」、「交流先の学校の日本人留学生の有無」、「日本留学希望の有無」、「日本旅行の経験の有無」、「日本で旅行したい場所」など、日本の言葉や文化を含め、交流先における日本に関連する事情、そして、「韓国で流行っている料理」、「好きな韓国または日本の料理」、「韓国（の大学生）の関心事」、「韓国の大学で人気の部活」、「韓国の大学の学食」、「韓国ドラマ」、「放課後に何をするのか」、「韓国の大学生が勉強にかけている時間」、「韓国でおすすめの旅行先」、「音楽やアーティスト」など、韓国の大学生の関心事や料理、ドラマ、旅行に関連するものが多かった。一方、FEU側では、「韓国語を勉強する理由」、「好きな韓国料理」、「韓国旅行経験の有無」、「韓国について知りたいこと」など、日本側と同じく交流先の学生が持っている韓国への興味に関連するものが多く、「日本でおすすめの旅行先」、「おすすめの日本料理」、「おすすめの日本の歌」、「日本の遊び」、「一番面白く読んだ日本人作家の作品」、「日韓の授業（登録

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

方式の違い」、「コロナ禍の中の日本の大学の状況」、「放課後に何をするのか」など、旅行や料理、歌、大学生活に関連するものが多かった。そのほか、「インターネット小説についてどう思うのか」、「好きな小説のジャンル」、「好きな YOUTUBE チャンネル」があった。

图 1 padlet 掲示板

**11월 4일 극동대학교 - ICU 교류회**  
 어떤 교류 시간을 갖고 싶은지, 교류 파트너와 이야기하고 싶은 테마는 무엇인지 자유롭게 적어 주세요! 뭐든지 괜찮아요~ 交流会に向けて期待していること、交流パートナーと話したいことがあれば自由に書いてください。なんでもいいですよお~!

**ICU**  
 1. 일본에 관심을 가지게 된 계기는 무엇입니까?  
 2. 지금 한국에서 가장 유행하는 음식은 무엇입니까?  
 0

**ICU**  
 - 한국에서 많이 쓰이는 일본어가 있습니까? 무슨 일본어입니까?  
 韓国でよく使われている日本語はありますか? どんな日本語ですか?  
 - 일본어를 배우는데 뭐가 제일 어렵습니까?  
 日本語を勉強していて何が1番難しいですか?  
 코로나지만 교류회가 생겨서 정말 기쁩니다. 한국어를 아직 잘 못하지만 한국 분들과 이야기 할 수 있는 것이 아주아주 기대됩니다. 잘 부탁드립니다!  
 コロナ禍でも交流会ができて本当に嬉しいです。韓国語はまだうまく話せませんが、韓国の皆さんとお話できるのがとっても楽しみです。よろしくお祈いします!

**(ICU): 학교 생활**  
 Q1: 왜 일본어를 공부하세요?  
 なぜ日本語を勉強されているのですか?  
 Q2: 여러분의 학교에 일본 유학생이 있어요?  
 皆さんの学校に日本人の留学生はいますか?  
 Q3: 방과후에 보통 뭐하세요?  
 放課後は普段なにをしますか?  
 0

**ICU**  
 1. 왜 일본어를 공부해요?  
 2. 제일 좋아하는 한식은 뭐예요?  
 3. 제일 좋아하는 일식은 뭐예요?  
 4. 지금 드라마를 보고 있어요? 무슨 드라마예요?  
 5. 요즘 어떤 노래를 듣고 있어요?  
 0

**(극동대학교):에너지 IT공학과**  
 Q1)  
 일본 내 여행을 간 것 중에 가장 재미 있거나 인상 깊었던 곳이 있나요? 추천하는 곳이 있다면 부탁드립니다. 日本旅行に行った事の中で一番おもしろかったり印象深かったりした所がありますか。おすすめのところがあつたら、教えてください。  
 Q2)  
 한국음식 중에서 먹어본게 있다면 어떤 것이 제일 입에 잘 맞았습니까? 저는 떡볶이랑 갈비가 제일 좋습니다. 韓国の食べ物の中で食べてみたものがあればどんなものが一番美味しかったですか。私はトッポッキとカルビが一番好きです。  
 Q3)  
 보통 일본 대학생들은 놀 때 뭐하는지 궁금합니다. 普通、日本の大学生は遊ぶ時に何をするのか知りたいんです。  
 0

**(ICU): 대만의 대학 일**  
 0

これらの掲示板作成に加え、筆者は ICU 側の学生に今回の VE のテーマに基づいて自分が話したい内容を韓国語で事前に準備するように指示した。なお、交流先の教員に受講学生の名簿を送ってもらい、グループ交流に向けて日本側で最終グループ分け (5 グループ)

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

を行った。今回の VE に参加した日韓の学生の人数が異なっていたため、日本側の学生は 3 名～4 名、韓国側の学生は 1 名～2 名が各グループに割り当てられた。

### 2.2 VE の参加者及び言語的背景

今回の VE に参加した学生は、ICU の「韓国語II」 (Sec.A<sup>10</sup>) 受講者 17 名と FEU の「グローバル日本語 2」受講者 9 名であった。どちらも教養外国語科目として実施される授業で、両校の学習者は同じく春学期に続き韓国語あるいは日本語を学び続けていた。なお、目標言語における参加者の言語能力は学習者によってやや異なっていた。

図2 VE参加者

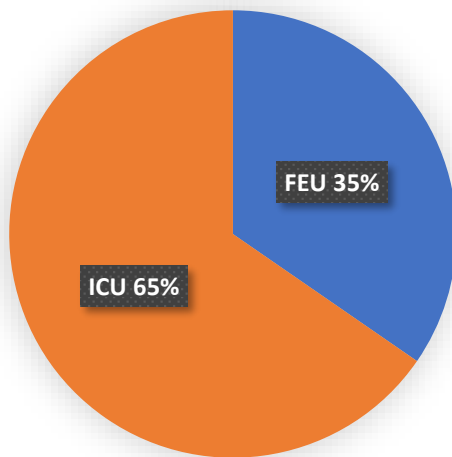
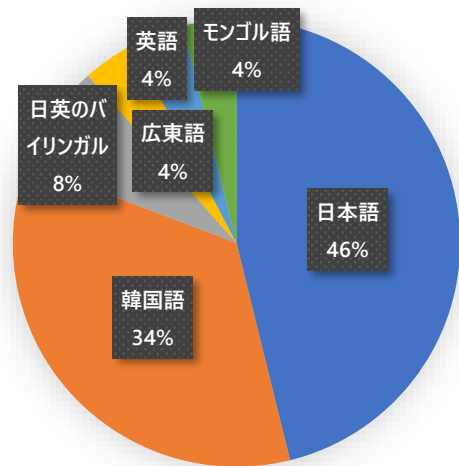


図3 VE参加者の第一言語



VE 参加者の言語的背景も日本側と韓国側の間で違いが見られた。韓国側の日本語学習者は全員韓国語を第一言語とする韓国語母語話者で構成されているのに対し、図 3 のように日本側の韓国語学習者の第一言語は、日本語以外に日英のバイリンガル (2 名)、英語 (1 名)、広東語 (1 名)、モンゴル語 (1 名) で構成されていた。特に今回の VE は、コロナ禍の中で日本に入国できなかった交換留学生や、本国に帰って現地で Zoom に接続して授業に参加していた留学生など、日本側の参加者は多様且つ複雑な状況を表していた。

### 2.3 当日の流れ

今回の VE は両校の授業スケジュールを勘案し、約 70 分間行われた。コロナ禍の中で、日本側と韓国側の大学では Zoom によるオンライン授業が行われていたため、参加者は筆者が事前に配った Zoom リンクに接続し、各自で VE に参加した。VE が始まり、筆者より今回の VE が行われた経緯や当日の流れについて簡単に語り、両校の教師の紹介に続き、両校の学生が目標言語を使って簡単に自己紹介を行った。その後、事前に割り当てられた各ブレイクアウトルーム [FEU 生 1 名～2 名、ICU 生 3 名～4 名] に入って、約 15 分間「日韓の大学生生活」というテーマで、出来れば目標言語を使って話し合うようにした。小グループ間の交流が終了した後、各グループで話し合った内容についてグループ代表が 1 分ほ

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

ど要約して、目標言語、または目標言語と母語を混用しながら発表を行った。なお、各グループでどのように交流が行われているのかを観るために、各グループのディスカッションリーダー（ICU 生、筆者が指定）を共同ホストとして指定し、小グループ間の交流の録画を依頼した。録画とは別途に、両校の教員は小グループ間の交流が行われている各ブレイクアウトルームに入ったりしながら、交流の様子を観察していた。さらに、今回の「即興型」VE について参加者はどのように評価しているのか、今後に向けて改善すべき点は何かを参考とするために、VE の終了後、両校の VE 参加者を対象に Google Forms を用いて、筆者が作成した全 15 項目の質問からなるアンケート調査を行った。

### 3. アンケート調査の結果

本章では、VE の終了後、ICU と FEU の VE 参加者を対象に実施したアンケート調査の結果を提示する。

#### 3.1 「即興型」VE に対する参加者のリフレクション

両校の VE 参加者は、今回の「即興型」VE について、「楽しかった」「大歓迎!」「嬉しかった」とポジティブに受け止めていた。「嬉しかった」と答えた理由としては、「韓国語または日本語（目標言語圏）を使って韓国人または日本人（目標言語のネイティブ話者）と実際話す機会ができた」「文化の違いを感じることができた」をあげていた。また、「（言語学習への）モチベーションが上がった」「目標言語の人々と交流することは互いに役に立つ」「勉強になった」「自分の日本語レベルが確認できた」と、学習面で刺激になったと回答した。なお、「十分に準備ができていない状態での交流会だったけれども、大変役に立った」と、今回の VE が突然行われた即興的イベントだったのにも関わらず「役に立った」とポジティブに評価していた。一方、「突然の交流会で驚いた」「慌てた」「緊張した」と、即興的な VE についてネガティブな意見も一部で見られた。しかし、「交流会を増やしてほしい」「またやりたい」という感想が多数の学生から提示され、今後の VE に対する学習者の強い希望が窺えた。

今回の VE で最も良かったこととして、参加者は「リアルに韓国語を使える経験ができた」「（教師以外の）ネイティブの人と会話できた」「（教師以外のネイティブの人に）自分の韓国語を理解してもらえた」「しっかりコミュニケーションがとれた」「授業で習った表現が使えた」など、教室で学んだ語彙や表現を使って教師以外のネイティブ話者と話すことができたことをあげた。また、「目標言語や文化、大学生活などにおいて互いの経験を分かり合えた」「自分の言語を目標言語にしている人々との交流ができた」など、「交流ができた」ことをあげた回答が見られた。なお、「ブレイクアウトルームで十分に話しができた」「面白い話があった」「楽しく話があった」など、小グループ間の雰囲気

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

をあげた参加者もいた。そのほか、「言語的に不自由な部分があったけれども助けあえた」など、互いに協力しながら交流が行われたことをあげた回答もあった。

一方、今回の VE で最も難しかったこととしては、「的確な単語や表現がすぐに出てこなかった」「話す能力が足りず言いたいことが言えなかった」など、言語面での不自由さをあげた学生が多かった。そのほか、「会話のテンポがつかみにくい」など、オンライン環境のトラブル、「平等に話すこと」など、話す機会が平等に配分されていなかったことへの不満、「質問がすぐに思い浮かばなかった」「緊張して聞きたいことが全部聞けなかった」「質問をかけたら翻訳機を使っただけの回答で時間がかかり気まずさを感じた」など、やり取りやコミュニケーション側面における問題を最も難しかったこととしてあげていた。なお、小グループにおける交流テーマが限定されており、関連したテーマについて話すことが難しかったという意見もあった。

今後の VE に向けての改善点として、「もう少し時間がほしい」「他のグループの人々とも交流したい」など、VEの実施時間を増やしてほしいという意見のほか、「交流テーマについて十分に考える時間がほしい」、「事前に共通の質問をいくつか作ってそれについて話したい」など、交流テーマをより具体化し、且つそのテーマについて考える時間がほしいという回答が見られた。なお、「日韓の人数のバランスを合わせてほしい」など、小グループ間の交流人数において日韓のバランスが取れていなかったことへの不満も見られた。小グループ間の交流における使用言語関連、「日本語セッション・韓国語セッションにそれぞれ分けてほしい」「今後はオフラインでやりたい」という意見もあった。そのほか、「自分の言語能力を向上させること」「互いの言語使用についてアドバイスがほしい」と回答した学生もいた。

図4 交流パートナーは適切だったのか

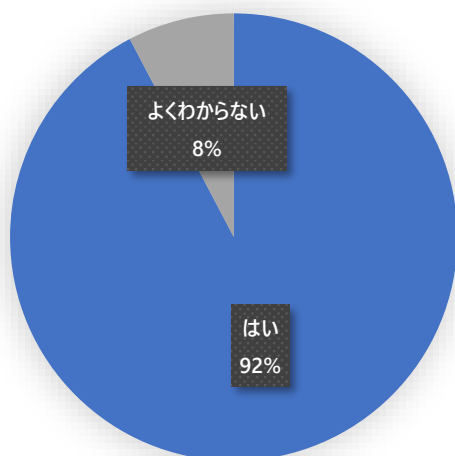
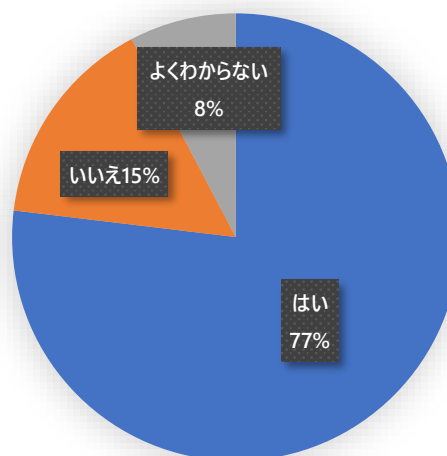


図5 交流人数は適切だったのか





## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

「交流パートナーは適切だったのか」という質問については、図 4 の通りにほとんどの参加者は「はい」と回答したが、日本側の学生では「よくわからない」というやや否定的な回答も 2 名見られた。「交流人数は適切だったのか」という質問については、図 5 の通りに「いいえ」と否定的な意見が 15%、「よくわからない」というやや否定的な意見が 8%見られ、VE 参加者のうち、約 23%の日本側の学生は満足していないという意見を提示した。「いいえ」と回答した人にはその理由を書いてもらったが、「交流人数が多く集中できなかった」、「日韓の参加者のバランスが合わなかった」と述べていた。この項目は、上記の自由記入式で書いてもらった参加者のリフレクションのうち、「平等に話すこと」と関連があると思われる。日本側では 3 名~4 名、韓国側では 1 名~2 名となっており、日本側の学生が目標言語を用いて話す機会が少なかったことに対して不満を表したと見られる。

図 6 の「小グループでのディスカッションテーマは適切だったのか」という項目について、ほとんどの学生は「はい」と回答したが、4 名の ICU 学生は「よくわからない」とやや否定的な回答を提示した。今回、大学生活というテーマで決めたのは、参加者にとって最も身近なものであり、かつ話しやすいトピックだと想定したためである。ただ、韓国語能力がより足りない学習者にとっては難しく感じられた可能性がある。

図 7 の「本日の交流パートナーと今後も交流を希望するのか」という項目については、「はい (85%)」「いいえ (15%)」と、多くの学生は今回の交流パートナーについてポジティブに評価していたが、日本側の一部の参加者はややネガティブに思っていたことがわかった。

図6 ディスカッションテーマは適切だったのか

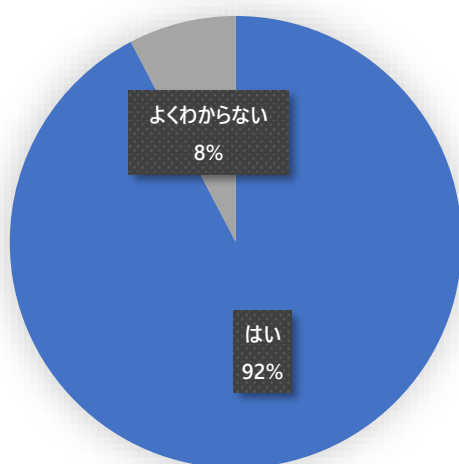
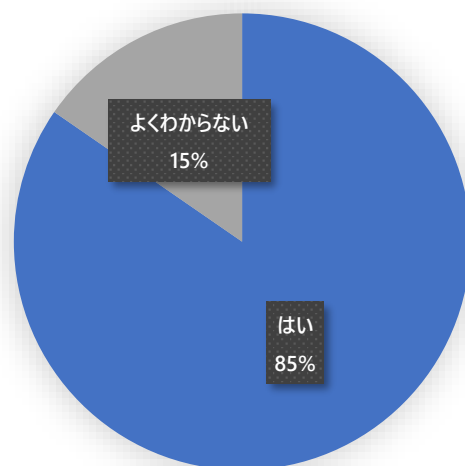


図7 交流パートナーと今後も交流を希望するのか



今後の VE に参考にするために「小グループに適切だと思う人数」について質問したところ、図 8 で見られるように、小グループでの交流に最も適切だと思っている人数は「5 名



## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

(48%)」「4名(32%)」「6名(12%)」の順で、参加者の多くは概ね4名～6名をグループ間の交流で最も望ましい人数だと思っていることがわかった。

最後に、「今回のVEが目標言語への学習動機を向上させたのか」という質問については、図9の通り、ほとんどの参加者は「はい(92%)」と回答した。「よくわからない(8%)」と回答した参加者は日本側の留学生または交換留学生で、この質問だけでなく、このアンケート調査全般を通して懐疑的な態度をとっていた。その理由は、語学能力とある程度関係があると推察される。交換留学生の場合、日本語が主な目標言語となっており、日本語能力が不十分な状態でほかの授業を受講した場合、授業に十分についていくことができず満足度が下がることがしばしばある。特に、今回はコロナ禍の中で日本に入学することができず、全ての授業を自国でオンラインで受講していたため、実際に日本に滞在しながら日本語力を鍛える機会が失われていた。そのような状況で第3外国語の母語話者との交流は心理的に相当な負担として働き、VEについて懐疑的な態度を堅持していたと見られる。

図8 小グループに適切だと思う人数は何人が

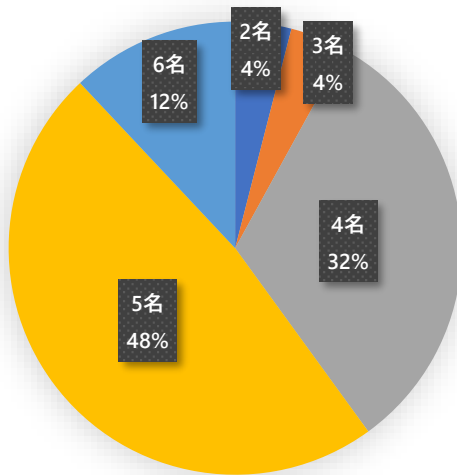
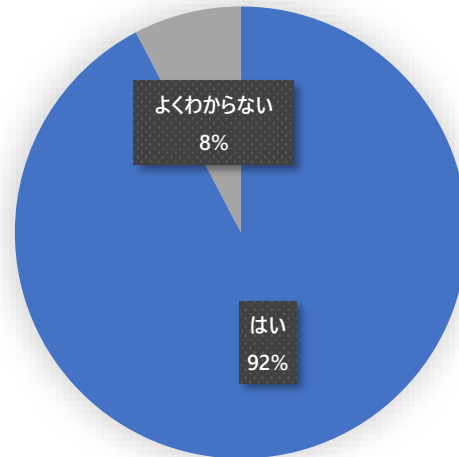


図9 VEを通して学習動機が高まったのか



### 4. 「即興型」VEの成果と意義

これまで筆者が韓国の大学と行ってきたVEはPBL型で、交流先の大学と学期を通して4回から7回にわたって同期型交流を行っていた(Ohe, 2018; 呉, 2020; 呉, 2022)。VEを行う前に、学生にVE授業の概要や趣旨について説明し、学生も十分に理解したうえで教師の支援の下で発表準備を行いVEに臨んでいた。また、数回にわたってVEを行うことにつれ、両国の学生同士の連帯感も徐々に強まり、より交流しやすい環境が構築されていた。一方、今回のVEは学期中に急に行われたもので、まさに「ぶっつけ本番」のように行われた「即興型」のVEである。VE授業当日まで1週間で切った時点で学生に交流の意向を尋ね、了解を得た時点で交流テーマについて知らせ、各自で関連の単語を調べるとともに、ディスカッションで話したい内容について準備してくるよう指示した。しかし、

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

時間的余裕があまり無かったため、準備段階で教師が十分にサポートすることはできなかった。また、アイスブレイクの時間もあまりなく、自己紹介が終わって早速ブレイクルームに入って小グループでの交流を行っていたため、互いにぎこちない雰囲気を感じられるグループもあった。なお、VEに参加した韓国側の学生の人数がICUに比べて少なく、「平等な」発言という側面で不満を持つ学生もいた。そのほか、学生から提出してもらった小グループでの交流の録画ビデオを観察すると、ウェブ翻訳機を使いながらやり取りをしている韓国側の学生がいて、スムーズにやり取りができなかったと語った学生もいた。以前行っていた韓国の大学との PBL 型の VE は全てコロナ禍の前に行われたもので、物理的に「教室と教室」、「グループとグループ」の形で行われていたが、今回はオンライン授業の中で各自孤立した状況で自分のパソコンを用いて交流を行っていたため、このような翻訳機を用いるという行為が可能だったのである。しかし、このような形での VE では、言語的なやり取りの流暢さや正確性はともかく、「相互行為能力」または「相互交渉能力」といった、VEを通して獲得できるスキルの習得は難しいと思われる。

上記のような問題点が見つかったのにも関わらず、前章で紹介したアンケート調査から分かるように、今回の「即興型」VEに対する学生の満足度は非常に高く、いくつかの側面で意義をもつ。まず、これまで行われた VE は、目標言語を専攻として勉強する学生を対象にした授業が多い中<sup>11</sup>、今回は教養科目または初級段階の言語能力を持つ学生を対象にした VE であるということである。PBL 型の VE では、参加学生は全て目標言語を用いて発表やディスカッションに臨んでいたため、中級以上の言語能力を有する学生を対象にしていた。しかし、今回は日韓両方において教養科目として目標言語を受講する学習者を対象に VE を行ったのにも関わらず、参加者の満足度が高く、もっと交流を希望する声が高かった。今回の VE 参加者の目標言語である日本語または韓国語は英語と異なって、多くの学習者が大学に入って初めて学ぶ初修外国語科目であり、学習歴も相対的に短い場合が多い。このような状況の中で、最も多数を占める初級レベルの学習者を対象に行った VE の経験やその成果は、今後 VE の活性化に向けて役立つと考えられる。

次に、上記で問題点として記した通り、今回の VE は「急に」または「即興的に」行われたため、時間的な余裕があまりなく、参加学生は VE に向けての準備または努力をあまりしていなかった。しかし、このような条件にもかかわらず、学生の満足度は非常に高かった。PBL 型の VE は、学生だけでなく教師も多くの時間を割かなければならず、教養授業を担当する教師にとって VE は「ややこしい」授業であるという認識もある<sup>12</sup>。しかし、今回のようにシンプルな形の VE は、教師にあまり負担をかけず、しかも満足度の高い国際間交流の教室活動として活用できる。

また、「即興型」の VE は、交流先さえあればいつでも可能だということである。今回は VE への依頼を受けてから 1 週間も経っていないうちに VE が行われた。すなわち、VE

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

について教師が開かれた態度さえ持っていれば、VEは気軽にいつでもできる教室活動である。最後に、長期的なプロジェクトだけでなく、一回性のイベントのようなプロジェクトであっても、目標言語や文化に対する学生の学習動機の向上は必要十分であるということがあげられる。特に、このような単発的な「イベントVE」は初級レベルの学生に有効であると思われる。

### 5. 教師のリフレクションと今後の課題

筆者が以前行っていたVEは、日韓の教師が時間をかけて十分に準備をした上で行っており、学期を通して数回にわたって実施された。しかし今回は、まるで「ぶっつけ本番」のように行われた一回性のイベントのようなもので、VEに向けて教師側からの準備や学生に対するメンタリングも十分ではなかった<sup>13</sup>。それにも関わらず、VEに対する学生からの反響は、予想以上に良かった。今回のVEは、コロナ禍のせいで1年以上すべての授業がオンラインに切り替わった状況で行われたため、「オンライン」という仮想空間に対して学習者が飽きてしまい、「オンラインによる交流」にそれほど興味を寄せないかもしれないという心配も抱いていた。しかし、多くの学生は状況と関係なく、目標言語・文化圏の人々と「つながる」ということに興奮し、嬉しかったと話した。また、今回の「VEは日韓の参加者の人数バランスが合わない」、「交流に参加する学生の語学能力がそれぞれ異なっており、やり取りに相当難しさを感じる学習者がいる」など、交流において最適の条件を満たしていなかった。しかし、学習者たちは笑顔で相手の話を一生懸命に聞いて、交流相手が適切な単語や表現を見つけられず困惑している時は、単語や表現を提案して助けあげたり励ましたりするなど、相手に対する理解と寛容の態度を堅持しようとする姿勢を表していた。異文化に対する好奇心や開かれた心は、異文化コミュニケーション能力を構成する重要な要素の一つである (Byram, 1997)。学生たちはVEへの参加を通して、このようなスキルを自然に身に付けていたと見られる。

事前にすべてを計画し緻密に準備して行うVEもあれば、今回のように即興的に行うVEもありえる。今後、様々な形のVEの可能性を念頭におきつつ、学習者が目標言語圏の人々と交流することはいつでも可能であるという開かれた態度で、教師は交流に向けて学生を準備させる必要がある。なお、教師として、様々な形の言語文化交流の機会を学生に提供できるよう努力を怠らないことも大切であろう。

今回のVEは授業の一部として行われていたが、高等教育におけるVEの定義や実践を具体的に定めている研究者の観点からすると、今回のオンラインによる日韓交流は、厳密な意味でのVEの要件をすべて満たしていないかもしれない<sup>14</sup>。しかし、教師が気軽にいつでも実践できるVE、初級レベルの語学能力を有する学習者が大半を占めている大学の初修外国語授業でも実践可能なVEを考慮すると、いわゆる「しっかりとした」VEだけでなく、

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

より様々な形の VE も想定に入れつつ、VE を授業内へ統合させる形の教室デザインを行う必要があるだろう。

### 引用文献

- 綾川邦俊 (2021) 「日露間における COIL 型授業の実践 1. —京都外国語大学・モスクワ市立大学「日露共同授業」を例に」 『ユーラシアへのまなざし』, 創刊号, 49-58.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Multilingual Matters.
- Byram, M., & Zarate, G. (1994). *Definitions, Objectives and Assessment of Sociocultural Competence*. Council of Europe.
- Deardorff, D.K. (2006). Identification and assessment of intercultural competence. *Journal of Studies in International Education*, 10(3), 241-266.
- EVOLVE(Evidence-Validated Online Learning through Virtual Exchange) Project (2023年7月5日) . <https://evolve-erasmus.eu/about-evolve/what-is-virtual-exchange/>.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: The role of attitudes and motivation*. Edward Arnold.
- 小玉安恵 (2018) 「オンラインによる異文化間協働型の日本文化の授業 COIL の試み—異文化間で活躍できる人材の育成を目指して—」 『日本語教育』 169, 93-107.
- Liddicoat, A.J., Papademetre, L., Scarino, A., & Kohler, M. (2003). *Report on Intercultural Language Learning*. Department of Education Science and Training.
- 文部科学省 (2018) 『平成 30 年度大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～公募申請状況について』.
- Moloney, R., & Harbon, L. (2010). Making intercultural language learning visible and assessable. In B. Dupuy, & L. Waugh (Eds.), *Proceedings of Second International Conference on the Development and Assessment of Intercultural Competence* (Vol. 1, pp. 281-303). University of Arizona Press.
- 森山新 (2019) 「日韓の共生をめざす日韓大学生国際交流セミナーと教師の役割」 『人文科学研究』 15, 121- 134.
- O’Dowd, R., & Lewis, T. (2016). *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice*. Routledge.
- Ohe, HG. (2018). Technology-Enhanced Approaches to the Development of Intercultural Sensitivity in a Collaborative Language Program: A Japanese- Korean Case. In M. Nishimura, & T. Sasao (Eds.), *Doing Liberal Arts Education* (pp. 61-74). Springer.
- 呉恵卿 (2020) 「異文化間コミュニケーション能力を高める外国語教室づくり—ICT を活用した日韓交流授業を事例に—」 『日本文化研究』 73, 261-281.
- 呉恵卿 (2022) 「日韓の外国語教室におけるバーチャル型国際間交流授業の実践と課題—言語運用能力と異文化間コミュニケーション能力に与えた影響を中心に—」 『ICU 日本語教育研究』 18, 3-19.
- Padlet (2023年7月1日). <https://ja.padlet.com/>.
- Rubin, J. (2016). The collaborative online international learning network: Online intercultural exchange in the State University of New York network universities. In R. O’Dowd & T. Lewis (Eds.), *Online intercultural exchange: policy, pedagogy, practice* (pp.263-272). Routledge.
- SUNY COIL. (2023年7月20日). <https://coil.suny.edu/>.
- 當作靖彦 (2017) 「グローバル時代のつながる日本語教育： ソーシャルネットワーキングアプローチ」 『Journal CAJLE』 18, 1-20.

## A Case Study on ‘Impromptu’ Virtual Exchange

<http://www.cajle.info/wp-content/uploads/2017/07/volume-18.001-020.pdf>

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society; The development of higher psychological processes*. Harvard University Press.

<sup>1</sup> ソーシャル・ネットワーキング・アプローチ (Social Networking Approach、SNA) (當作, 2017) という用語が、日本語教育を中心に似たような概念で使われることもある。

<sup>2</sup> 事業タイトルは「COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援」である。

<sup>3</sup> <https://coil.suny.edu/>. [アクセス日：2023 年 7 月 20 日]

<sup>4</sup> 異文化に対する好奇心や開かれた心、多様な社会的現象や相互行為のプロセスに関する知識、異文化の様々なコミュニケーションを解釈して自分の文化と関連づけて解釈できる能力、さらに自分と他者の文化を批判的に評価できる能力などを網羅する用語で (Byram, 1997)、自己と他者の文化に対して批判的に解釈できる「文化解釈能力」も含まれている (呉, 2020; 2022)

<sup>5</sup> 日本と韓国の間で、日本語と韓国語を用いて行われた VE のことを指す。森山 (2019) でも日韓間で行われた COIL 型のオンライン国際セミナーを取り上げているが、日本語のみを媒介にして行われている。

<sup>6</sup> FEU の教員とは、以前 COIL 関連の研究会で会ったことがあり、オンライン交流に興味を持っていることを互いに知っていた。

<sup>7</sup> 筆者の授業ではグループ LINE を設けて教師 (または TA) と学生、学生同士のやり取り、または授業の内容や関連した質問、録音課題の提出などに用いていた。

<sup>8</sup> <https://ja.padlet.com/>. [アクセス日：2023 年 7 月 1 日]

<sup>9</sup> 日本側の回答者は 15 名で、韓国語のみで回答したのが 9 名、韓国語と日本語を併記したのは 6 名であった。日本語のみで回答した学生は一人もいなかった。一方、韓国側の回答者は 9 名で、韓国語と日本語を併記したのは 4 名で、それ以外は全て韓国語のみで回答していた。

<sup>10</sup> 「韓国語II」は曜日が異なる 2 つのセクションが設けられている。

<sup>11</sup> 筆者がこれまで行った韓国との VE の場合、日本側では教養科目として韓国語を履修する学生が参加していたのに対し、韓国側では日本語を専攻する学生が 9 割以上を占めていた。

<sup>12</sup> 筆者が 2019 年度に日本の大学で韓国語を教える教師を対象に行った調査によると、COIL を含め VE に対する教師の認識はかなり低く、「ややこしい」という印象を持っていた。

<sup>13</sup> VE に向けての準備とは、言語的なもの以外に、心理的・状況的なものすべてを網羅する。

<sup>14</sup> EVOLVE(Evidence-Validated Online Learning through Virtual Exchange) プロジェクトの定義によると、VE は「持続性」、「定期性」という特徴を有しており、一回性のミーティングのように持続的教授法に欠けたプログラムは VE に該当しないと述べている (<https://evolve-erasmus.eu/about-evolve/what-is-virtual-exchange/>) [アクセス日：2023 年 7 月 5 日]。